
ヘルムート・ラッヘンマンの“トラウマ” ——音の“明るみ”を聴くこと

Mousikè 編集室 (Art-Phil)

「私にとって作曲することは、常に不安とともに／喜びに満ちて、ある種の“トラウマ”と向き合うことであり…」(プログラムノートより引用) 演奏に先立つ楽曲説明において、ヘルムート・ラッヘンマン (Helmut Lachenmann) はそう語った。「弦楽四重奏曲第3番《グリド (叫び)》」および「アレグロ・ソステヌート(クラリネット[バスクラリネット持替]・チェロ・ピアノ)」の2曲から構成された本プログラムは、彼の音楽における“トラウマ”について理解するための好機となった。

「弦楽四重奏曲第3番《グリド (叫び)》」では、不定形な音列の断片群が遠心的に音響空間を構築する様相を聴くことができた。繊細で金属質な音形が第1ヴァイオリンによって弾かれると、第2ヴァイオリンやヴィオラのフラウタートの微かな翳りが追走する。その音の戯れの間隙に、チェロのグリッサンドが音形の断片群に外傷的な強度を付与する。あるいは、音形の断片群が交叉する瞬間、各奏者の強烈なピチカートが点としての音を穿つ。混沌とした音形の瓦礫から、音の布置連関が星座のように描き出されるかのようであった。

続く「アレグロ・ソステヌート」では、音の衝突と融合から新たな音響が生成される局面を聴くことがで

きた。ピアノの硬質な打弦の減衰に、クラリネットの無音の息吹が連なる。そして、特殊奏法によるピアノのグリッサンドの波間に、チェロの不定形な音列が浮遊し錯綜する。各奏者が弾き出す音の律動は、不定形な音列から発散した緊密な残響のなかで折り重なる。その微細な共振とともに、噪音は楽音へと新たに生まれ変わっていく。各楽器の特性がアンサンブルにおいて変容する過程がみられ、「楽器による具体音楽」の諸相に照準が当てられた。

本プログラムを通じて、ラッヘンマンの音楽をめぐる“トラウマ”とは、音形の断片群が交叉する瞬間に立ち現れる音の“明るみ (Lichtung)”を指すように思われた。外傷を孕む不定形な音列から流出する残響は、周囲の音響を包含しながら新たな音響へと変成する。知覚された音、その衝突と破裂、あるいは無意識的に感知される音の間伐において、「未聴の音」への啓示が宿る。そのような音の“明るみ”にこそ、創造への狂気と意志に満ちた作曲家の笑み (Lachen!) を見出すことができるのではないだろうか。

当日の会場(収容数:約300名)は満席となり、「現代音楽」をめぐる諸問題はいまま「聴衆」の内奥に息づいていると確認することができた。■

コンポーザム 2009 (2009年5月26日)

ヘルムート・ラッヘンマンの室内楽

岡 静代 (Cl), 菅原幸子 (Pf), 辺見康孝 (Vi), 亀井庸州 (Vi), 安田貴裕 (Vla), 多井智紀 (Vc)

東京オペラシティ リサイタルホール [東京都新宿区]

①弦楽四重奏曲第3番《グリド (叫び)》(2001), ②アレグロ・ソステヌート (1986-88)